

## 『大阪春秋』第182春号で幕

写真は『大阪春秋』第182春号、特集「ビバ！たからづか」が表紙を飾る。182号をもって休刊になるという。図書館などで定期的に読んでいたので残念なことだ。昨日は『月刊島民』終刊をレポートしたが、再び『大阪春秋』休刊を取りあげること。

編集後記から「大阪春秋」は公器である。我々編集委員は大阪の出版文化を守りたいという心意気だけで頑張ってきた。気がつけば、「大阪人」「上方芸能」をはじめ多くの大阪に関する雑誌がなくなっていた。「大阪春秋」は最後のともしびとなっただけに、なおさら存続への思いは強い。「大阪春秋」誌は、戦前に南木芳太郎が発行した郷土研究「上方」の志を継ぐものとして1973年に創刊された。先人たちのあつい思いが綴られている。

「大阪人が知らず知らずにおちいつている、古典、伝統文化への軽蔑を、このあたりで反省したいと思う。(中略)

右のような考え方により、小誌「大阪春秋」は名もなき無力な庶民の有志によって企てられた。前途幾多の難渋おそれながらも何とか一人歩きできるよう育てて頂きたく、大方のご指導とご支援をひたすら乞い願う次第である。」

大切なのは、その「精神」を受け継ぐことであろう。文化は精神のリレーに他ならない。「大阪春秋」のともしびをこのまま潰えさせる訳にはいかない。引き続きみなさまのご支援とご協力を願う次第である。 大阪春秋編集長 長山公一

この編集後記を読んで、『大阪人』第66巻第5号増刊、2012年5月の「休刊のお知らせ」を思い出した。

『大阪人』は大正14年(1925)12月、当時の大阪市長・関一が設立したシンクタンク・大阪都市協会が創刊した『大大阪』が前身でした。『大大阪』は近代都市・大阪市のあるべき姿と解決すべき問題を記事の柱として、市民生活と市政の動きを伝えるものでしたが戦時の紙不足で昭和19年(1944)1月号でやむなく中断、戦後、昭和22年3月号からは『大阪人』と改題し復刊いたしました。以来、「市政と文化」を考える市民雑誌として歩み続け、平成11年(1999)には、全国に大阪の魅力を発信することを目的に紙面を大幅に刷新し、全国の主要書店に販路を拡大させました。

平成19年(2007)からは当財団(大阪市都市工学情報センター)で事業を継承し、大阪の文化・歴史さらには市政情報等を発信し続けてまいりました。

しかしながら、書店販売部数は伸びたものの、本誌も昨今の景気後退の影響を受け、広告収入等が減収し、収支の改善を図ることがきわめて難しく、残念ながら休刊することに至りました。



(2021年5月2日)